

## 〈人間の深い悩みに答えを示したキルケゴール〉

ドラッカーは、デンマークの哲学者であるキルケゴールを極めて高く評価していました。『渋沢栄一とドラッカー 未来創造の方法論』（角川書店）の中でも何度も引用した『すでに起こった未来』（ダイヤモンド社）の中に、1章分を使ってキルケゴールの思想についての小論を載せています。

私は元々エンジニアで、哲学に何の素養もないので、私がキルケゴールの哲学的な内容について解説しておくべきかどうか迷いました。しかし、『渋沢栄一とドラッカー 未来創造の方法論』で、人間の社会的責任についてかなりの紙面を割いて説明した以上は、このキルケゴールの解説をやり過ぎすわけにはいかないと思いました。

このコラムのタイトルである「人間の深い悩み」であり、ドラッカーがキルケゴールだけが答えを示した問いというのは、「人間の実存はいかにして可能か<sup>1</sup> (How is human existence possible?)<sup>2</sup>」という問いです。

この問い自体が、哲学的な匂いのする、意味のよくわからない問いです。「実存」という言葉が使われているからです。哲学の分野における「実存」という言葉の意味を説明しようとすると、「現実存在」と「本質存在」などといった言葉が出てきて、どんどんと深みにはまって行ってしまいます。ですから、ここでは「人間の実存はいかにして可能か」という問いは、「個別的な存在としての人間自体が中心という考え方はありえるのか」というくらいの感じでとらえておいていただければいいと思います。

そもそも「個別的な存在としての人間自体を中心とする考え方」は当たり前と思われるかもしれませんが、19世紀は、「社会を中心とする考え方」、つまり「社会はいかにして可能か<sup>3</sup> (How is society possible?)<sup>4</sup>」という質問が主流でした。

社会を中心とする考え方とは、ルソーによる「いかなる意味が人間の人生にあるにせよ、すべては、社会の存続にとって客観的に必要とされるものによって決められる<sup>5</sup>」という考え方に象徴されるものです。

つまり、「個々の人生が意味をもつのは、それが社会にとって意味のあるものと関連があるときだけである。しかも、個々の人間が自己を実現することができるのは、社会の客観的な目的を実現するなかにおいてだけである。要するに、人間の実存はない。(中略) 存在するのは市民だけである<sup>6</sup>」という社会的存在としての人間という考え方です。

<sup>1</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>2</sup> Peter F・Drucker “The The Ecological Vision” Transaction Publishers

<sup>3</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>4</sup> Peter F・Drucker “The The Ecological Vision” Transaction Publishers

<sup>5</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>6</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美

しかし、社会的存在としての人間として、現世でいくら貢献し自己実現したとしても、個別的な存在としての人間は、いずれ死を迎えます。世の中への貢献や自己実現は、死の問題を解決してくれるわけではないのです。死がある限り、個別的な存在としての人間には絶望しかありません。

また、社会的な存在としての人間は、夫、妻、父、母、子、隣人、市民として存在します。しかし、個別的な存在としての人間の本当のことは、誰からも理解されません。個別的な存在としての人間は、自らの意識の中に閉じこもって孤独に存在するしかないのです。

社会的存在としての人間は、社会の価値観や信念を世界の現実として受け入れますが、個別的な存在としての人間は、社会の価値観や信念を受け入れることはできません。

このことは、夫婦の関係にある男女が、配偶者とは違う人を愛してしまったことを考えればすぐにわかります。社会的な存在として社会の価値観や信念はわかっているとしても、個別的な存在としては自分の感情を抑えることはできない。個別的な存在としての人間にとっては自分の感情こそが真実であり、社会の価値観や信念は欺瞞であり虚構なのです。

19世紀のヨーロッパはこの問題を、「純粋に倫理的なものに逃れることにより、すなわち徳の根拠を人間の理性に置くことにより、出口を見つけ出そう<sup>7</sup>」としました。しかし、倫理によって、高潔さ・勇気・信念を与えることはできても、生死に対してはいかなる意味も与えることはできませんでした。

これらのことを見極めていたキルケゴールは、「人間の実存は、精神における個人と社会における市民を同時に生きるという緊張状態においてのみ可能である<sup>8</sup>」と言ったのです。

どんなに社会に貢献し自己実現を果たそうが、どこまで行ってもだれからも理解されない孤独な自分がある、死の絶望から逃れられない自分がある、という緊張状態の中で人間は生きるしかないというのがキルケゴールなのです。

では、人間は、社会的存在としていかに貢献しようが、死の絶望の中で生きていくしかないのでしょうか。死の絶望をもたずに死ねるようにする方法が全体主義です。個人の人生に意味はない、個人は全体のために死ぬべしという思想です。「全体主義の教義において重要な意味を持つものは、いかに生きるかではなく、いかに死ぬかということ」なのです。

さらに、先ほど倫理は生死の問題に意味を与えることができなかつたと言いましたが、倫理を強調することは、国民のために死ぬべきといった全体主義につながる危険性をはらんでいました。

ただ、全体主義は単純に悪とも言えない面があります。ドラッカーは次のように言います。「全体主義の哲学は、人の死に覚悟を与える。そのような哲学の力を過小評価することは、

---

訳、(ダイヤモンド社)

<sup>7</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生+佐々木実智男+林正+田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>8</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生+佐々木実智男+林正+田代正美訳、(ダイヤモンド社)

きわめて危険である。悲嘆と苦難、破局と恐怖の時代、すなわち我々の時代にあっては、死ねるということは偉大なことだからである<sup>9</sup>」

いくら全体主義が、死自体の絶望をなくし、死の覚悟を与えることができたとしても、全体主義の教義において、個人の人生に意味はなく自己犠牲による死が人生だとするならば、人生の本質は絶望でしかないことになってしまいます。やはり、人間は孤独と絶望の中で生きるしかないということなのでしょう。

ドラッカーは、人間を孤独と絶望から救う一つの答えが東洋に思想の中にあるのかもしれないとして、「自我を殺し、涅槃（ねはん）すなわち無の境地に立つことにのみ唯一の答えを見る東洋の聖人たち<sup>10</sup>」がいることを示し、「存在」ということがそもそも無いとする東洋の思想を紹介しています。

そしてドラッカーは、キルケゴールがもう一つの答えを提起したと言うのです。それは、信仰において個別的な存在としての人間を生きるという考え方です。

ドラッカーは信仰について次のように言います。「信仰とは、人間は創造物であり、自律的な存在でも主人でもなく、目的でも中心でもないが、しかし責任と自由をもつ存在であるということの認識である。信仰とは、人間が本質的に孤独であることを受け入れることである。そして、たとえ『死の瞬間まで』であったとしても、神とともにあることの確実さに圧倒されることである<sup>11</sup>」

そしてドラッカーは、キルケゴールの提起した信仰と全体主義との違いを次のように言うのです。「キルケゴールの信仰もまた、人に死の覚悟を与えてくれる。しかし、それは同時に、人に生きる覚悟も与えてくれるものである<sup>12</sup>」

ドラッカーがキルケゴールに関する小論を書いたのは、1945年の第二次世界大戦終結から4年を経た1949年のことです。ドラッカーはこの小論を「絶望の淵にあって書いたものである<sup>13</sup>」と述べています。これは大げさな表現ではないと思います。ドラッカーはユダヤ系オーストリア人です。ヒトラーやスターリンが行った残虐な行為が戦後明らかにされるにつけ、ドラッカーは「人間に絶望した<sup>14</sup>」と述べています。

ドラッカーは社会生態学者として社会を見つめてきました。ドラッカーの著作の大半は社

---

<sup>9</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>10</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>11</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>12</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>13</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

<sup>14</sup> 『すでに起こった未来』P・F・ドラッカー著、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美訳、(ダイヤモンド社)

会に関するものです。しかし、社会だけでは十分ではない。社会との関わりを超えた、個別的な存在としての自分についても意識しておく必要があることを、ドラッカーは私たちに伝えておきたかったのだと思います。

私は『渋沢栄一とドラッカー 未来創造の方法論』の読者に信仰を薦めたいわけではありませんが、哲学に素養のない私が書いたこのコラムは、読者のみなさんにとって外乱になっただけかもしれません。

ただ、『渋沢栄一とドラッカー 未来創造の方法論』も、主に社会の中における人間について書いたものです。『渋沢栄一とドラッカー 未来創造の方法論』を書いた私自身にとっても、「精神における個人と社会における市民を同時に生きる」というテーマは考えさせられるものでした。それを、読者のみなさんにもお伝えしておきたいと思いました。

文責：國貞克則